

やまどり

令和4年度

群馬県支部俳句大会成績発表

(特選・県支部長賞)

生れてすく風の洗礼子蟬 吉沢美智子 (吉岡町)

(特選・上毛新聞社賞)

ものゝの隠れし岩屋化の雨 木村恵里子 (大泉町)

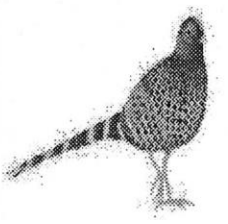
(入選)

ふらごこにゆらゆら記憶つむぎをり 小林 和子
 春潮やオラシヨの島をちりばめて 吉井たぐみ
 咲く前の桜並木の幹の張り 杉山やよひ
 四万ブルー湛へてダム湖木の芽晴 小林 悦子
 桜葉ゆるや午なき牛舎棟 石井 昭子
 父の忌の傍とはし桐の花 小菅とこ子
 人影に寄りくる鯉や若葉風 市村 一江
 囀りや奥社に続く登山口 高嶺 京子
 子燕の声の賑はふ無人駅 酒井 寛子

【選考】

無記名の作品を選考7名(原田清正・宮崎至夏子・武藤洋一・大塚洋二・吉藤淳子・本下涼薫・吉澤草子)が各々10句選句した。高ポイントの中から特選・入選を決め、同点の場合は原田清正が順位を決定した。なお、選考は受賞の対象外とした。

俳人協会
 群馬県支部
 ☆
 発行所
 高崎市飯塚町737
 TEL027-361-0870



特集 ふるさとの俳人 (2)

夭折の俳人 上原 群青

群青七回忌

堀口星眠

2月はじめの日曜日に招かれて、久しぶりに下磯部の群青遺居を訪れた。急に暖かくなって雨のぼらつく日であった。丁度「勿忘草夕日は雨をこぼしけり」群青という作りはじめの句を思ひ出させる雨であった。枯草も、石垣もすべて昔のまま、すぎ去った日が懐かしく思はれた。車を下りて小川ぞいに歩いてゆくこの道は、開業しはじめの頃から俳人須藤ふみさんのところまで、何年も通った畦道であった。その頃は未だ私は群青さん知らなかった。後になって、群青さんが病気になる前から、須藤さんとも俳句を見せあふようになつた様子を直接彼女から聞いた憶えがある。

「小母さん、こんな句が出来たよ」と照れながら縁側に来たことを、ふみさんは嬉しそうに話してくれたものである。ふみさんは一足先に亡くなって、私は須藤さんの所まで来る必要がなかった代りに、その一軒手前の群青さんの家には何回も立ちよつた。一緒に、アカシヤの咲く遠くの丘を眺めて、この風景に感じしたこともある。雲の見える広野の景色は、いかにも群青さんの好きそうな風景であった。私もこういう景は大好きで嘗て私の庭も、川や丘や空を居ながら眺めることが出来たのだが前に大きな家が建つて、この空間を失った。私はその時、私の寿命は十年短縮したと

家内に話したものだ。群青さんは、最後まで、この風流な住居で雲を眺めることが出来たわけである。けふの七回忌にふみさんの敏達さんは相馬ヶ原の自衛隊から、弟さんの理兵衛さんは、東京のパート勤務から、それぞれ帰郷してをり、尚健在のご両親を囲んで、暖かく静かな一家の様子が美しく思われた。「みづから我が家の焚火よりけり 群青」この句の味はひは正にピタリというわけだ。

もつ群青さんのように若い、純粹な作家に会うこともないと思ふ。苦悶はしたが、私の最も心にくる帰郷の思出と共に、群青さんの遺作が鮮やかによみがえってくる。(昭和45年執筆) (四面につづく)

令和4年度群馬県支部会員

本下涼薫 荻原葉月 堤一巳 大塚洋二 石井昭子
 春木征子 高橋洋一 酒井寛子 鈴木乘風 金子十筆
 杉山やよひ 本田巖 笠井智都 林恵美子 北原東洋
 男 佐々木美恵子 羽鳥止子 荻原富江 小林悦子渡
 辺陽子 矢野間妙子 荻原多香子 大谷孝子 北村田
 美子 小菅とこ子 深谷征子 深谷信郎 吉藤青楊
 吉沢美智子 斎藤博文 大澤文子 南雲節子 須賀静
 子 永塩菊江 武藤ふみ江 大井節子 増田志津子
 小島ますみ 岩崎登江 市村一江 小林和子 岸和代
 木村恵里子 善養寺玲子 山賀登江 須川良子 角田
 はる子 吉藤淳子 篤正登志 福田昌子 福田新樹
 片桐れい女 真下章子 山本三千代 珍田千代子 田
 島文子 山谷三千江 蟻川文秋 宮崎至夏子 高嶺京
 子 弥城節子 中村明子 森美知子 高橋栄子 星照
 子 椎名和代 中嶋孝子 町田洋子 北川武夫 佐藤
 栄子 濱名博光 杉木輝夫 金子禮子 櫻井なるみ
 吉井たぐみ 倉林はるこ 星野よう子 永山比沙子
 馬上絹代 矢野間稲霧 原田清正 佐藤ヒナ 野口淳
 一 橋爪ひさ子 吉澤草子 金子笑子 柿沼あい子
 堀越純 内田宏 星野合子 加藤園子 武藤洋一 木
 暮陶句郎 (6月30日現在)

令和4年群馬県支部俳句大会作品

1 長幼の健やかな身も盆供とす
産声のあと祝砲の雷一つ
荻原 葉月

2 衆人の口を塞ぎぬ滝の音
雪降り亡母の古里どうしたる
雪だけどワクチン注射出かけねば
橋爪ひさ子

3 苜狩り妻早々と腰下ろす
眼の手術控へて書きし賀状かな
豆添へし病院食や追儼の夜
野口 淳一

4 退院を祝し窓辺に梅香る
捧げ持つ指の白さや官女雛
町田 洋子

5 紙びなの髪ふくらまず日差かな
春風や合格通知ポケットに
先頭の蟻穴を出て風を読む
吉井たくみ

6 春潮やオラシヨの島をちりばめて
防人の鼓樓遙かに揚雲雀
主なき庭満開に人を呼び
佐藤 ヒナ

7 揚雲雀自己主張しつ高みへと
地虫出で待つてましたと啄まれ
故郷へ帰る歌です雪解川
櫻井なるみ

8 卒業証書丸めて見たる明日かな
引き抜いた足跡とじる春の泥
目が遊ぶ心も遊ぶ春の風
金子 禧子

9 春さがし風に追されて颯爽と
雪しまく山の向かうのまた向かう
杣人の鉦打つ音や露のたう
北爪 武夫

10 白鳥帰る千里の旅ぞ当才子
春愁の鏡のぞけど映らざる
聞き納め二度三度ある法師蟬
田島 文子

11 三分粥膳に一枚薄紅葉
音立てて指を零るる新小豆
大海のごと大風の青田原
福田 新樹

我が城とばかりに羽音女郎花
両耳を蟬に託して佇めり

12 白樺の光うながす春の雲
これよりは山々笑ふ母郷かな
残照の湖白鳥のシルエット
福田 昌子

13 山笑ふ湖畔に集ふツリーリング
対岸は選挙あるらしダリア植う
また一人加はるベンチ花の昼
真下 章子

14 つきあたりつきあたりして春の蝶
咲く前の桜並木の幹の張り
小鳥屋の積まれある籠囀れる
杉山やよひ

15 着ふくれて無学文盲紙一枚
狐火やふるさとダム底ちらちら
如月やラヂオ流れる英会話
金子 土筆

16 降る雪の去年と今年を繋ぎたる
風花の行方気紛れ風まかせ
山と積む南瓜目を引く売場かな
山谷三千江

17 つくばひの次第に青く春の水
ひとところ天突く枝や寒牡丹
水仙の折れたるままに生き抜けり
林 恵美子

18 春の夢つづきは明日と飛び起きて
外は雨部屋の片付け啄木忌
雛に借り道具で遊ぶ小児かな
佐々木美恵子

19 初松頼高嶺の星の長睫毛
初日の出黄金光りの浅間山
厳寒に七十路生きし面構
北原東洋男

20 枯蘆の影を川面に夕日落つ
雪原を薄墨色の川くねり
小夜更けてひまなく降るや六つの花
黛 正登志

21 四万ブルー湛へてダム湖木の芽晴
長病みの母へ北窓ひらく朝
塗り替へし馬塞の白さよ風薫る
小林 悦子

22 一木を神と拝み初詣
海鳴りの磨きていたる水仙花
常世なる光のかたち露の玉
本田 巖

23 目覚めよと雑木に春の日の滴
夕さりの鄙こそよかれ土佐水木
帰りしか鶴三日の餌を残し
永塩 菊江

24 轉と日の斑降り来る森の午後
庭躑躅白花はまだ蕾なる
たちまちに山藤森をのつ取りぬ
吉澤 章子

25 しぶき上げ鯉ひるがへる立夏かな
野ねずみのたんぼの絮はなれずに
分封のみつ蜂襲ふすずめ蜂
深谷 征子

26 ささめきに似てふれあへり葦草
山独活の天ふら旨し田舎そば
風光り箕輪城址に関の声
高橋 榮子

27 雪解水坂東太郎波騒ぐ
アカシアの雨にけぶれる丘の町
長電話卒寿の人よすみれ草
須賀 静子

28 指先に薬湯の香や青すだれ
旅の本伏せ置き明けの時鳥
夏暁や川に落ち入る露天の湯
萩原多香子

29 葉桜や万葉集を愛読す
朝夕に笛届く日和かな
春風を聞く畑に立ち一呼吸
蟻川 玄秋

30 月隴人の気配に振り向けば
見て貰ふことに徹して神輿見ず
露の蔓取る気なれば又見つけ
金子 笑子

31 城跡へ山道行けば諸葛菜
身丈より長き糸出す浦島草
白話草テニスボールのころころと
深谷 信郎

32 雨の日の臨時休業鯉のぼり
ミーティング了えて飛び出す朝燕
赤城神社玉砂利粗く薄暑かな
大谷 孝子

33 輪になつて昼は菜飯の塩にぎり
挨拶は後にしようぜ花見酒
うたた寝の窓辺の椅子に春の風
濱名 博光

34 桜薬ふるや牛なき牛舎棟
菜の花が狭めて峡の用水路
マスクして園児整列花あふち
石井 昭子

35 関伽提げし郭公寺に声しきり
若き日の永久に秘めをり桜貝
糠雨の降るや棚田の苗代田
鈴木 乗風

48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36
餌放り立夏の鯉を引き寄せり 乳をのむ児の手乳房に蝶の昼	久し振りの姫鏡舌山笑ふ 山路への九十九折々藤咲けり	ひらき初む薔薇の名前は恋心 ふらこにゆらゆら記憶つむぎをり	籐鮎の釣り師餌を練る水うらら 水陽炎ゆらめく木々や夏兆す	家主の姿の見えず葛茂る 耕耘機に譲る畦道仏の座	夏ささす風はシヨパンの夜想曲 ミモザ揺れ風駆けぬける閑所跡	森の上に虹はや消ゆる道造忌 色白の昔の母よ麦の秋	守り継ぐ落人村のお雛粥 春風を入れて授業を始めけり	職辞して輝きを増す庭の薔薇 聖五月初寝返りを打つ嬰子	万愚節服着せぬ猫そつと抱き 高らかに歌ふ画眉鳥五月来ぬ	湧き水のごときがありて憲法日 老鴛や大樹の洞に日の当たる	猫の座す牛小屋静と若葉雨 信濃より毛野の地に咲く野春菊	父の忌の佛とほし桐の花 裏山の雉子の鋭声や走り梅雨
堀越 純	小林 和子	弥城 節子	吉藤 淳子	宮崎至夏子	矢野間稲霧	市村 一江	木下 涼薫	柿沼あい子	矢野間妙子	今井久美子	山賀 春江	小菅さと子
61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49
雨の糸ほつりほつりと花菖蒲 空青く植田広がる利根郡	鉢より大き椿一花や風の中 憲法記念日今こそ守れこの平和	初夏や床運動の着地音 蝉しぐれ発つ気動車にのまれけり	黄金週じつと我慢の家籠り 桑の実や水田を捏める耕運機	老鴛の声すがすがし谷の風 新茶来る筆庄弱き姉の文	花は実には島村渡船幕下ろす 間合良きシエフのもてなし風薫る	散る花か嫁入り雨か箕輪城 蛇せはし柚の花匂ふ窓辺かな	崩えそめし餌台繕ふ愛鳥日 マランソンの市長手を振る夏燕	七輪の着火てまどる庭薄暑 アカシアの花の移り香にはたづみ	空家の庭にもいのちヒヤシンス 林立の煙突かすむ鹿島港	新聞にくるまれレタスと蟻んこと 三山を据ゑて青麦平らかに	夜桜にふれつつ背伸び肩車 すかんぼの靡くや風の遊歩道	敷松葉過ぎ去りし日々覆ひけり 熱中症ビルのジャングル銀座かな
星野よう子	内田 宏	須川 良子	武藤 洋一	高嶺 京子	吉沢美智子	大澤 文字	永山比沙子	吉藤 青楊	大塚 洋二	山本三千代	岩寄 妥江	馬上 絹代
62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72		
緑風を受けて羽撃く鳩の群 掃省子や母の味付け手土産に	役所へと続く水木の花の道 黄鵠鶴滝に触れゆく芽吹時	ものふの隠れし岩屋花の雨 ジャングルジムに子等の賑はふ春休み	樟大樹五月の空を揺らしをり 梅雨ささす終着駅の掛時計	列車の灯近づくほかは夏の霧 風花や足湯に急ぐ足音して	白鳥の青きを残り北帰行 紙雛の袴は金の座り皺	リハビリの友の手紙や柿若葉 菩提樹のハート若葉や恩師癒ゆ	我が庭のアンネの薔薇は咲き継げど 在りし日のままに軽トラ桃の花	行き交へる絵柄のマスク白マスク 夏休み久に会ふ子の声変はり	音もなき雨にくづる白牡丹 ふるさとは流れに冷す甜瓜	青梅雨や白き子鳩つがなき 芽柳や共に喜ぶ友の居て	渾身の力の尽きて散る桜 花摘みの脚立あちこち林檎園	雛髻粟の揺るるばかりのひと日かな 子燕の声の賑はふ無人駅
善養寺玲子	木村恵里子	中嶋 孝子	関 東風	斎藤 博文	加藤 楓子	原田 清正	星野 令子	酒井 富子	中村 明子	橋爪ひさ子		

特集 ふるさとの俳人 (2)

夭折の俳人 上原群青 (二面よりつづき)

追悼二句

堀口星眠

故原群青君の種多し一本あり
天あふぐゆふすげに汝が星灯れ

妙義岸壁書をめぐはず群青忌

【群青日記】

8月4日(金) うすくもり 丸子に着いたのが8時20分ごろ美ヶ原のバスを待つ間、彼女は「自然讃歌」を読んでいた。そして僕がその本をリュックに入れる時僕は僕のうしろに彼女を感じた。山小屋付近で休憩。皆御土産を買いに行ってしまったので彼女と二人きりになってしまった。だまって山の向こうを見つめている彼女を僕は本当の彼女だと思つた。そしてハーモニカをとりだしてうつむきにふきだした姿が僕の網膜に焼きついてしまった。足元の草いちごが赤かったのを彼女は気づかずかずに・・・「りんどうや松虫草の咲いているお花畑を通して僕は彼女と二人でソバを食べに行つた」

8月5日(土) 雨 休みの日の次の務はイヤなものだ。今日はほとんど仕事をしない。星眠先生が僕の「新樹賞」の作品が予選を通過したと云われたが本当だろうか。本当ならインターネット位空をこびたいものだ。

8月6日(日) 雨 ミニユニット・レターを聞く。ひざしぶりのだ。勉強がはかどらず心配だ。もう少しやる気をださなくては・・・

8月7日(月) くもり 先日的美ヶ原へ行って来てから少し頭が変になってしまったようだ。仕事もしたくな

いし句も出来なくなつてしまった

彼女から手紙が来た。「アルプスのお花畑で」の歌詞を書いてくれた。僕はほとんど野辺山へ行くときにぜひ彼女を連れて行ってやりたいものだ。そしてこれからはお花畑で昼寝をして夢を見よう。あ、早く山へ行きたい。今日はくもっていたのに日が暮れたら空が青くなつて星が出て来た。赤岳も晴れているだろうか。

8月8日(火) 晴 病院につとめていると自分の時間がなくて本当にこまる。せめて午後全部勉強出来ればよいのだが19・20日は確水峠へ吟行だ。僕も行くことになつているがこの頃自分は気の抜けたヒールのようだ。行つても句が出来るだろうか。でも峠の空気を沢山すえるから楽しいだろう。(手紙を一通書いた、相馬先生、XXちゃん)

8月9日(水) 快晴 僕の「新樹賞」の作品がやはり予選を通過していた。まるで夢のようだ。星眠先生も終始ニコニコしていたが僕にとってごきげんな日である。佳作になればいいものだと云つたがあまりよくはない。急いで野辺山へ行きたくなくなった。

8月10日(木) 快晴 命というものはどういふものだろうか。虫の命でも人の命でもたやすく消えてしまふものだ。今朝元気でいた人が・・・僕は不思議でならない。ほぐらは「いかに死ぬべきかを考えるために生きる」のだがはたしてそうだろうか。突然しくなつてしまふ人は何故突然しくなつてしまふのだろうか。何も考えるひまがないだろうに・・・しかし僕が高原や山へ行つて自然の美しさの千分の一でも感じたり言葉であらわしたりするとき非常に生甲斐を得るがそこから自分の姿や生活が間接的にわかつてくるのだろうか。青い空に雲がちぎれていった。しかし山はいぜんとして山である。

8月11日(金) 晴 星眠先生の「俳句のすすめ」という座談会があつた。先生は人に話しをするのがあまり好きではないらしいが素晴らしい話をして下さつた。俳句を考えるのにも詩をつくるのにも僕らの心に感動す

るものだけを表現するのであつてそれ以外は二七セブンであることを強調していた。そして俳句には魔力があるからめつたに人にすすめることができるのだ。僕はその人の人生を大きく変えてしまつたからだ。僕は一生俳句をつくるだろう。星が出ていた。

8月14日(月) はれ 前橋の多田先生へ用事があつたのでついでに馬酔木9月号をとりに行つた。多田先生はいつものように静かな笑顔で家へ案内してくれた。僕は期待していたことであるが三句入選は嬉しいものだがあと一か月たつと作可歴もちょうど2年になるが早いものだ。欲ができて早く上位に行きたいものだがまあ一生懸命やることだ。

8月17日(木) はれ 集金の途中彼女の家へ寄つた。前々から追分の大日向村へゆく道を聞きたがつていたからだ。明日友達と一緒にゆきたいという。そのとき彼女の兄さんがいたが(遊びに来ていたのだろうか)その人の眼を僕はあまり好きでない。何故か知らないが・・・僕は来月野辺山へゆくのだがそのとき彼女を案内してやろうと思つたが一緒に行くだろうか僕は歩きたい。思い出を残して歩け歩け。休んだらまた歩け。

9月10日(日) 快晴のち曇 稲子湯についたのは8時30分。雲ひとつない最上は良い天気だ。僕はこの日から白樺尾根を上つて北八ヶ岳へゆくつもりだが変更して夏沢峠を経て硫黄岳へのぼるつもりだ。硫黄岳の硫黄の匂いが晴天をつらぬいてにおつてくる。僕は冷たい山の水を水筒につめた。A君とは小諸から一緒に来た人で八ヶ岳を縦走するという。僕は最後までこの人の名前を知らない。朝の食事をたいている。夏沢峠へついたのは午後1時30分。カスがでて来た。息をつく間もなく硫黄岳へのぼる。硫黄岳の方にはすさまじい冷たいガスの中でリンゴをかじる。齒に沁みるようだ。硫黄岳石室は頂上から10分とゆかない所にある(2時30分ごろ到着)。3人の山男がつかれを癒していた。夕方A君が到着。石室も大分人が来る。夕食後すぐ寝床に入る。ランプの灯がほそい。僕が高い山の上で誰

も知らない中を寝ているところかどと不思議になつて来た。何故こんな所で寝るといつのか
 10月18日(水)うすくもり 群大を受けると決めてから何となく落ち着いて来た。星眠先生はだまって月曜日を休んでしまった。上高地へ行ったのだ誰にも内緒の中に・・・

【群青看護日記】

上原敏護

1月23日 群大病院に入院。「兄ちゃん、囲りに人声があるけど誰かいるのかい」群大病院に入院したこと、囲りにも患者さんのいる事を説明、うなづいてそのまま休む。2時間ほどして呼吸困難を訴える。鼻から酸素吸入、いくら落ち着く、心電図を取った後個室に移る。呼吸困難になり大きいと変える。

1月24日 細原先生が蒲鉾を持って親友と見舞に来てくれた。弟は嬉しげに話をする、蒲鉾になにか想い出があるようだ。苦しそうな表情をみせまいと努力している。胸がいたむ思いた。眼科医の検査。

1月25日 学友多数が弁当持参で来る。弟は嬉しそうだ。眼が見えなくても声色で誰だかわかる。一人一人名前を呼んでいく。山の話ばかり。馬酔木2月号をせがまれ買ってくる。同じ所を何度も読まされる。とても苦しそうだ。

1月26日 今日学友が見舞に来てくれた。友達はありがたい。苦しむ為かどこでもよいかから揉んでくれとせがむ。友達は交代で揉んでくれる。そのたびに「ありがとう」を繰り返している。吸入器はすこしも離せない。苦しい為か十分おきに時間を聞く。

1月27日 喉の、湯きをつたえろ。水はやらぬよう言われた。「マチカ沢の水はうまい。一俵の水はうまい」と口ばしする。「兄ちゃん、山で喉が、渴いたらインスタントジュースがうまいんだ」看護婦さんに谷川岳の雪をもってこいとせがむ。学友が今日から二人交代で看病するから休んで下さうと言いつ。

1月28日 水をほしががる。水をやるとむさぼる。話をしている内はこっくりしているが話かただと水をほしががる。腹になにかたまる、口から管を通して出す。窓から何が見えるかと聞く、榛名山、子持山、小野子山、赤城山がとても奇麗だ。弟は「山はいいな、早く歩きたい」と繰り返す。

1月29日 先生方、先輩、後輩60人程が見舞に来てくれた。先生が「苦しそうだな、すぐよくなるよ」弟は「冬山縦走を思えばこの位気になりません」。先生は次の言葉が出なかった。看護婦さんが谷川の雪だと雪を持ってきてくれる。弟は「うまい、うまい」と夢中で食べる。夜半呼吸困難になる。

1月30日 山岳部の学友が見舞に来た。驚いた。四月の登山計画の話をしている。「俺が計画するから書いてくれ」と言いつ。本当に山が好きなんだ。

1月31日 数学の先生が見舞に来てくれた。手の平を揉んでくれる。弟は気持ちよさそうだった。「先生、揉むのが上手ですね、毎日誰かの手を揉んでいるのですか」先生は、涙をながしながら、うなづいている。弟は呼吸の苦しさを人にみせまいと懸命のようだった。

2月1日 いびきをかいて寝ている。入院してから一睡もしていない様な気がする。夜、堀口先生に逢いたがる。「堀口先生、こぼれだ。早くきてくれ・・・」うわごと、あとは解らない。

2月2日 朝方、母に逢いたがる。母の寿司を食べたいという。学友に寿司を買って来てもらう。その時母は偶然にも寿司を持って来てくれた。吸入器を口にあてながら寿司をほつづける。「母ちゃんの寿司はうまい。」母に堀口先生の事を聞いている様子だった。夜、学友となにか話をしている時、急に山へつれて行け、山にいきたいよ・・・。「酸素吸入器停止。私と父母、学友4人。」

弟の口癖「人をうらぎる事は悲しい事だ。」

【群青作品集】

(昭和34年)

静かなる鯉の波あり秋の水

(昭和35年)

きりぎしの狐舎が影もつ十三夜

鶉鳴くや山並び立つ霜の天

一面の枯草滞るる日の白さ

みそささい我が家の焚火よりけり

鶉鳴いて雲間に光る浅間かも

小雀来て暮るる泉をすく去りぬ

春炬燵柄長がのぞく親しさよ

勿忘草夕日は雨をこぼしけり

紫雲英田の日はあたる霧が動き出す

夏薊濡れて薄日が雲を出つ

新樹より蛾を放つなり山の霧

雨雲の裾かがやくや巢立鳥

夏蝶や霧にゆがめる山毛大樹

懸果去り露散る音の俄かなる

松虫草雲押し流す沼の風

牛立ての霧に重たきキャベツ積み

栗熟れて露のしたり火山灰に落つ

俄かなる雨冷え来たり濃電胆

懸果来ぬ声とはならず雨に濡れ

(昭和36年)

林道に低く蛾のとぶ居待月

落葉松の落葉音なし泉鳴る

風花に驚く星や野火消えて

霜降昔こそなき鴟の遠のけり

落葉松の風綿蟲を忘れ去る

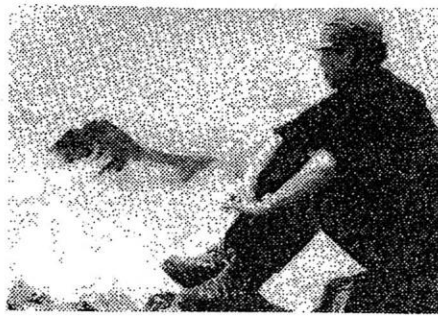
栗鼠はしり朝の落葉を驚かす

朧なり泉声へ蛾の落ちゆきて

小鳥たちさわぐ律や雪積もり

谷川の雪代かぶる露の臺

新雪の凍る夕日に鶉散れり



落葉松に郭公翔けてひるがへり
 枯山へ飛ぶ雪はやし茅鳴りて
 満月の下に林道の雪光り
 根雪よりの泉ふき出す四十雀
 牧の犬もどりて眠る臘月
 茅むらに雉子の動かず雪解風
 いづこまで蟻子に追はるる花つづき
 郭公や暁ひかる牧草地(清里)
 夜鷹去り童女のピアノまたひびく
 時鳥翔け赤岳の雪くらし
 青茅やはるけき朝の湖ひかり
 残る蛾や霧のケルンに朝到り
 馬に乗りゆふすげみだしゆく男
 流星や岩にひとりの飯冷ゆる
 花野ゆくわかものたちに月黄なり
 鳴く夜鷹月下の山毛櫨に雨ひかり
 雲の上に蒼天ありて鷹のこゑ
 (昭和37年)

蒼天に並ぶ枯木や鷹のこゑ
 雪解けて鷹鳴き散れり牧草地
 落葉一つ二つ夕焼へ舞ひあがる
 うぐひすの鳴き去る夕べ茅しりし
 水塵や森をいそげる郵便夫
 筒鳥や朝の霧吹く牧草地
 檜鳥や朝の地吹雪森をぬけ
 朝降りし雪すく消えて牧開
 残雪や吹かれて鴉の声遠き
 餌を食める栗鼠に淡雪ふりつづく
 仙臺山喰馬車のすたれて梅雨に入る(北軽井沢・大宇村)
 枯れつくす落葉松淡し鴉の群
 サイロ光る雨の雪加は鳴きつづけ
 雉子鳴けり夕べ雪降る樅の中
 雷雲や小さき蜻蛉の群れ来り
 沼明けて森またねむる露時雨
 蛾の落ちて岩に消えゆく雪の前
 岩ひびり霧よりになきケルンの日
 (昭和38年)

落葉して霧渦まけの丘樺
 朝寒や早よりくらきランプの灯
 雪の中星よりのくらきランプの灯
 落葉松は落葉残らず雪の中
 (昭和39年)

十六夜の暮舎明るし山毛櫨の中
 雨はげし暮舎に茸の香の満ちて
 落葉松に風の生える落葉焚
 肩にふれ綿蟲去りぬ山毛櫨の中

上原群青君の思い出 鈴木乗風

上原群青(本名・基誓)君は下磯部から。私は金古町から昭和31年に高崎観音山下の高校に入学し、クラブ活動で写真部に入部したが彼との初顔合わせであった。

彼は繊細な感覚の持ち主で、垢抜けのした風景写真を得意としていた。お互い切磋琢磨し第一回関東学校写真展に応募し、優秀学校賞の受賞の栄に浴することが出来た。

彼は卒業後体調をくずし、安中市の堀口医院に入退院をくりかえし加療していることを知らされた。金古町からは20キロはあるであろうか自転車でも幾度も見舞いに行った。その都度、星眠先生はずいぶん俳人なので、俳句を始めないかと何度も勧められたが、当時、私は全く興味を示さなかった。

その後、私は上京し隅田川に架かる永代橋近くに下宿した。ある時、近所の書店で俳誌「馬酔木」を見て、久しぶりに群青君が活躍している名前を目にして驚いた。あの時、彼に勧められ作句していたら、星眠先生や原田清正先生、小林和子先生に知遇を得て、まともな俳句ができていたに違いない。

彼はその後快方に向かい、昭和37年群馬大学教養学部に入學し勉学に励んでいた。しかし、2年生の頃だと思いが雪の登山中、猛吹雪に遭遇し無事に下山したもののそれが原因で体調を崩し群馬大学附属病院に入院したが、手厚い看護も辛しく不帰の人となってしまう。(令和4年5月執筆)

【上原群青略歴】(本名・基誓)

- 昭和15年7月15日生
- 昭和28年3月 磯部小学校卒
- 昭和31年3月 磯部中学校卒
- 昭和34年3月 群馬県立高崎高等学校卒
- 昭和34年 堀口医院に入院同年9月より句作を始めた。退院後療養、勤務、受験準備をしながら句作をつづけた。
- 昭和37年 群馬大学教養学部入学
- 昭和39年2月2日死去

「秀句鑑賞」

木下 涼薫

友釣りの鮎市に光り合ふ

大串章第八句集「恒心」所収

鮎は、体色はオリーブ色、腹部は銀白色でその姿は実に美しい。一方、縄張の意識が強く自分のアトリリーに入ってきた他の鮎を激しく攻撃する。友釣りは、このような鮎の習性を利用したユニークな釣り方である。釣糸につけた餌の鮎を泳がせ、攻撃を任付けて他の鮎を掛針で釣り上げるのである。

掲句は、友釣りで鮎を釣り上げた瞬間を詠ったものである。釣り上げられた鮎と餌鮎が互いに空中を舞うかのごとく、銀白色に光り合っているのだ。空中に光り合うのが絶妙で、両者の命の輝きが一瞬にして伝わってくる。

更に光り合っている鮎の姿だけでなく、香魚と言われる鮎の香り、滔々と流れる激流の音までも見えてくる。このように視覚、聴覚、嗅覚の共感覚を生みだしており、作者の美意識に深い感銘を受ける。

因みに掲句は、碓氷川において詠んだものであるが、他にも大串章が群馬県で詠んだ次のような句もある。

夢二の絵飾り湖畔の宿涼し(榛多湖)

万緑に句碑を残して兜太し(伊香保)

合歡の花アジャビユの峠越えにけり(碓氷峠)

機会があったら、吟行に出かけてみてはいかが。

吾妻渓谷周辺

金子 士筆

吾妻渓谷

吾妻線岩島駅下車。車の場合には145号線吾妻渓谷入口より。関東の耶馬溪とも呼ばれる美しい渓谷。特に、ミツバツツシの咲く四月中旬、新緑の五月、紅葉の彩る10月下旬から11月上旬がベストシーズン。

深谷遊歩道や、ハイキングコースが整備され、新しく出来た紅葉台橋からは八丁暗がりをよく見ることが出来ます。吾妻渓谷最大の見せ場「八丁暗がり」は両岸がわずか2〜3メートルに迫り、昔はシカも往来したという。両岸が最も狭いこの辺りの深谷を八丁暗がりという。八ッ場ダム周辺

吾妻線川原湯駅下車。2021年に完成した「八ッ場ダム」。八ッ場あがつま湖に架る三本の巨大な橋や展望台からは壮大な景観が広がります。不動大橋から望む「丸岩」。戦国時代には城が築かれていたという。ベレー帽をかぶった様な形の奇峰、100メートル余りの岩壁で新緑、紅葉の候は筆舌に尽くし難い美しさです。不動尊堂不動の滝

不動大橋のたもとこの不動尊から眺める落差90メートルの雄大な滝。四季折々の風情があり、滝の岩壁には岩苔など...

日本一短いトンネル紅葉晴れ
筒鳥や吾妻渓谷七曲り
感嘆の声の吸はれて紅葉晴れ
十筆
十筆
十筆

おすすめの吟行地

草津周辺

北原東洋男

お奨めの吟行地の依頼を受け、私共俳句会の吟行先草津周辺を中心に案内をしてゆきたいと思えます。草津町は海拔1200メートルにあり、風光明媚の所です。

湯畑は草津最大の源泉で町の中央にあり85度の源泉冬場はもつもと湯煙を上げ、湯の香と強酸性の匂いその源泉をさますため木の樋幾条にも流し三ヶ月に一回湯花採りは草津ならではの風物詩。その前にある熱の湯では湯もみぎが楽しめます。周辺の建物は大正ロマンの風情があります。

地蔵地区、今は裏草津と言われ、地蔵堂や目洗地蔵があります。顔をますに入れると温泉蒸気で顔がしっとりする、コロナで温泉で手を洗う設備もあり、地蔵の湯の細道を登ると「コニール」聖母の建てた小教会があり、日曜の朝ならばミサも聴かれよう。

西の河原はいたる所から温泉が湧き出て湯川へと流れています。ピジターセンターもあるので吟行の資料になるかもしれません。具足を投げ捨てたと言われる物の具の池は綿菅が見られます。

浅間周辺 天明三年の浅間焼け、その時流れ出した溶岩が奇観を呈している。鬼押し出し、溶岩樹型は吟行地として最高。溶岩樹型が型として残っているのは珍しいところです。光鮮も観られます。浅間焼けの犠牲者を祀る鎌原観音堂、浅間大滝、魚止めの滝など吟行地として、大変良い場所です。吟行先で回数が多い所は信州の修那羅峠、匠の里は、十回ほど行っており、時季で表情が変わります。

第32回 全国ふきわれ俳句大会

募集要項

吹割溪谷や沼田市の風物を詠んだ、自作の未発表作品を募集します。

投句料 2句1組につき1000円

投句締め切り 令和4年8月1日

問合せ先・〒378-0303

沼田市利根町追員37番地『全国ふきわれ俳句大会実行委員会』事務局まで。電話・0278-562111

第16回 全国俳句大会

◆日時・9月13日(火)正午開場

午後1時開会有楽町朝日ホール

(入場無料)

東京都千代田区有楽町2・5・1

有楽町マリオン11階

電話03(3284)0131

○交通JR有楽町駅中央口または銀座口・地下鉄銀座駅C4出口・地下鉄有楽町駅D7a・D7b出口

◆当日句会

☆大会当日参会者より1句を募集、当日選者による選を行い、各選者特選3句講評ならびに特選賞、入選15句には入選賞を呈します。

☆投句締め切り1時・会費無料

【当日句会選者】(五十音順)

菅野孝夫・中西夕紀

檜山哲彦・藤田直子

森岡正作・山西雅子

主催 公益社団法人俳人協会

後援 朝日新聞社

四季の畔道

秋刀魚、烏賊、鮭の不漁をなげいていたら、鯉は大漁だという。確かに温暖化は深刻だが、狂った生態系の中でも、生き物は意外にしたたかです、条件さえ整えばまた戻ってくるという証ではないだろうか。

先日、利根川河畔の遊歩道で鯉の産卵に遭遇した。護岸のコンクリートの隙間から川面に突き出た楊の根の下で、数匹の大鯉がばしゃばしゃ音をたてている。まさか、こんな所で見られるとは思ってもしなかった。また、我が家の裏の赤城白川に虫が出ると言っていると、同じ町内に住んでいながら驚く人がいる。その結果、この時期に岸辺の草を刈ってしまうことになる。確かに人間の起こした温暖化ではあるが、狂いを直すことができるのもまた人間だけだ。細々

とまたしたたかに生き抜いている自然を知り、まもり、温暖化の原因をひとつずつ取り除いて行きたいものだ。(よ)

こらむ・しだりお

沖縄復帰50年。もうそんなに経ったのか、というのが実感だが、それまでは車は右側通行、買い物はドル紙幣、本州はもちろん九州へ行くにもパスポートが必要。復帰前の1958(昭和33)年、戦後初めて甲子園に出場した首里高ナインが、出場記念に球場の土を持ち帰ったところ、植物検疫法違反で没収。海に捨てられてしまった。沖縄が日本ではなかったことを象徴する出来事だ。1972(同47)年、紆余曲折はあったものの、ようやく「沖縄県」となった。復帰前後の暮らしは、現在放送中のNHKの朝ドラ『ちむどん』で描かれている。沖縄が舞台になってはいるが、ヒロイン暢子は上京して調理師を目指す。しかし、社会人としての基本ができていないからと、新聞社でアルバイトをさせられる。これが暢子の運命を左右することになるのだが、▼スタジオに編集局フロアを再現させるのに机の配置から

机の上は何を置けばいいか、フィルムカメラの扱い方:「新聞考証をお願いしたい」と制作責任者から電話があった。17年前に上毛新聞社が舞台になったドラマで知り合い、今も個人的に付き合いを続けているが故の依頼だった。もちろん快諾▼オンラインによる打ち合わせを重ね、2〜4月はNHK近くのホテルに泊まり込みで撮影に立ち会った。朝8時半から夜11時まで。計画ではもっと早く終わる予定だが、俳優もスタッフも熱意にあふれているためなかなか終わらない。月ぎめ読者の漸減傾向が止まらない新聞。もう一度新聞を見直すきっかけになればうれしい。(M)

編集後記

支部俳句大会も無事発表することが出来た。後援戴いている上毛新聞社に感謝。▼特集「ふるさとの俳人」は第一回の神田松鯉氏につづき第二回は、夭折の俳人、上原群青氏を取り上げた。一途に生きた一青年の生き様をご覧いただきたい。▼事務局長の武藤洋一氏がNHKの朝ドラ『ちむどん』に新聞社の編集長役として8月19日に出演予定である。ご期待頂きたい。(清)